図180　遺跡の位置
５万分１地形図「新潟」

図181　発掘調査区

椋C遺跡　北区太田

椋C遺跡は、法花鳥屋遺跡（一〇八ページ）や葛塚遺跡（一二〇ページ）と同じ砂丘列の内陸側（東側）の裾にある。海岸線からは約五・五キロメートルで、遺跡の南約一キロメートルには県内最大の潟湖福島潟が広がっている。

遺跡は、平成十六（二〇〇四）年に葛塚中学校グラウンド新設工事に先立つ試掘調査で発見された。その後、市道工事に伴い豊栄市教育委員会が発掘調査し、縄文時代中期（約五〇〇〇～四〇〇〇年前）から鎌倉・室町時代に至る様々な時代の遺物が出土した。特に弥生時代後半から古墳時代初頭（二〇〇～一六〇〇年前）の土器が多く、中でも北方系の続縄文土器がまとまって出土したことが注目される。

弥生時代、本州では稲作を生活の基盤とする文化が波及するが、北海道では漁労・採集・狩猟を生業とする文化が続いていた。こうした人々が使っていた独自の土器のことを続縄文土器という。東日本では、この続縄文土器が出土する遺跡が点々と見つかっており、日本海側は新潟県が南限になっている。市域では葛塚遺跡、南赤坂遺跡（五八ページ）、御井戸B遺跡（五一ペ

ージ参照）などで見つかっている。

椋Ｃ遺跡では、続縄文土器のほか、長野県北部や北陸地方の影響を受けた土器も見つかっている。このことは、この地域が様々な文化の交流地であったことを物語っている。椋Ｃ遺跡で見つかった続縄文土器は、どれも小さな破片であるが、この地域の弥生文化と続縄文文化とのかかわりを調べる上で重要な資料である。

図182　続縄文土器